

## 復活節第6主日 (ヨハネ 15:9-17)

僕は主人が何をしているか知らない



復活節第6主日B年に選ばれた福音朗読は、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」(15・13)が際立っています。私たちが大きな愛を感じる方について考えてみましょう。

献堂百周年一週間前となりました。私は記念ミサの終わりに予定されている感謝式の挨拶を原稿にまとめようとしています。大司教様への感謝の言葉は、ずいぶん前から温めてきました。挨拶を文字に起こそうとする段になって、「主任司祭は大司教様の思いにあまり応えられていないのではないか」という気持ちになってきたのです。

私たちは一般的には、「大司教様の考えを私たちが察してあげることなどできるはずがない」と考えていると思います。「親の心子知らず」それが当たり前だというわけです。ですが、私はもっと大司教様の田平教会にかける思いを、知るべきだと思うのです。

たとえば、「田平教会献堂百周年の祈り」は、私が試しに作ったものを大司教様に届けて目を通してもらい、手直しを受けて出来上がった祈りです。この祈りを唱えているのは田平教会の皆さんですが、ここに込められた思いは、最終的には大司教様の思いです。

その証拠に、祈りの終わりごろに出てくる「宣教の拠点となるよう努力します」この一行は私が用意したもとの祈りには全く触れられていませんでした。皆さんが「宣教の拠点となるよう努力します」と唱えるということは、それはすなわち「私たちは大司教様の思いに応えるよう努力します」と公言しているのと同じなのです。

大司教様は来週の献堂百周年のために、すべての予定をキャンセルして、田平教会のためだけに時間を取ってくださいました。百周年を記念するミサ、記念碑の除幕式、祝賀会、すべてに大きな期待をもっておいでになるはずですが、ただ単に記念ミサの司式をなさるのではなく、この日までどんな準備をしてきたかを、この日のミサで確かめたいわけです。先ほどの祈りの一節「宣教の拠点となるよう努力します」を唱える私たちを眺めながら、どのようにしてこの聖堂を宣教の拠点としようとしているのか、計りたいわけです。

本日の福音に、「僕は主人が何をしているか知らない」(15・15)とあります。もし私たちが、大司教様にとって僕にすぎないならば、大司教様がこの日をどれだけ楽しみにしておいでになるのか知らなくても構わないでしょう。「宣教の拠点となるよう努力します」と唱えながら上の空、他人事のように思っているのも何も責任を問われないでしょう。

ですが、私たちは大司教様にとって「僕」なのではないでしょうか。「友」なのではないでしょうか。「もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。(中略)わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。」(15・15)この教会を、祈りと賛美がこだまする家、宣教の拠点となるよう努力してほしい。大司教

様の思いを私たちは知っているのです。ですからすでに私たちは、「友」と呼べる身分にさせていただいたのです。

ここで時々取り上げている聖書ギリシャ語の日本語訳の問題ですが、「友のために自分の命を捨てる」この部分は、「友のために自分の命を置く」と日本語にするのが元の言葉により近い翻訳です。大司教様は、私たち田平教会神の民を友と認めてくださって、百周年記念行事の一切を任せてくださったのです。

ご自身の思い通りの記念行事を行いたいならば、わざわざ主任司祭に任せなくとも、ご自身がすべて取り仕切って、当日おいでになれば済むことです。しかし大司教様は、私たちを友とお考えになり、すべてを私たちにゆだねたのです。大司教様がすべてを委ねたのですから、命を委ねたのと同じではないでしょうか。

ですから私たちは、大司教様の思いを知らない人であってははいけません。大司教様はどんな思いで、ミサの聖歌を聞いておられるだろうか。どんな思いで、献堂百周年の祈りを聞いてくださっただろうか。私たちは仮に「どんな思いで聖歌を歌いましたか?」「どんな思いで献堂百周年の祈りを唱えましたか?」と聞かれたら、「私たちは大司教様の思いを知らない僕です」と答えてはいけません。

私も、主任司祭挨拶を書き始めて、「私は何と親不孝であったらうか」と思い始めています。大司教様の思いを汲もうともせず、これまで25年過ごしてきたのではないだろうか。いくつかの教会の主任司祭を歴任してきて、それぞれの教会に大司教様がどんな思いを込めておられたか、爪の先ほども考えたことがあったらうか。自問自答して、暗澹（あんたん）たる思いなのです。

もちろん大司教様の心の中は誰にも推し量れません。大司教様の耳には、私たちでは知ることもしないいろいろな情報が届いていることでしょう。社会的な言い方をすれば、公表できない事情もある中で、常に全ての決断を下しているのだと思います。そこは知る由もありません。

それでも、大司教様の期待にいくらかでも応えるために、一つの選択をしなければなりません。それは、今週の福音朗読に繰り返されている「互いに愛し合いなさい」この生き方を選ぶということです。互いに愛し合う方向にかじを切るなら、友としてお認めくださった大司教様の恩に報いることができるのではないのでしょうか。

行事の一切を委ねてくださった大司教様から、「僕ではなく友として」迎えていただく日はもう目の前です。「大司教様は私たちに何を願っておられるだろうか」そんな問いを一つ自分に持って、この一週間で過ごしましょう。大司教様が皆さん一人ひとりにかけての期待に答えを出すのは、皆さん一人ひとりです。